

自立した主権者 をめざして



Vol.27 責任をとるということ

KEYPOINT

- ・日常生活で感じるちょっとした不正や違和感、世の中の不条理についてあなたはどのように感じましたか？
- ・それについて周囲にどのように話していますか？

SUMMARY

自分が何か行動を起こすと、責任を取らされるという考え方は自らを委縮させます。自由な行動には責任がついてまわりますが、よりよい社会は誰かがつくってくれるものではありません。日常で感じる違和感や不条理に疑問を投げかけ、周りとは話し合うことに一体どんな責任が生じるのでしょうか

お知らせ

「がんばろう、日本！国民協議会」の機関紙 522号（11月1日発行）1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場をYouTubeチャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



いう強制的なマスク着用の機会を得てしまったのかもしれない。

子どもの声に耳を傾けるということ

そうした状況の中でも、「子ども達のマスクを外させたい」という動きがあります。子どもの成長におけるデメリットや、偏見や差別がおこることを危惧していること、外したいと思うけれど同調圧力によって外せないことがあるため、学校で「外すことは悪いことではない」と明言してほしい、など、理由は様々です。子ども達の笑顔を見たい、という親の気持ちも含め、こうした声はだんだん大きくなっていくのでしょうか。マスクだけではありませんが、こうした運動は反対の圧力を生むこともあります。今度はマスクを外さないことが悪となる場合も考えられます。先述の「顔パンツ」の発想からいけば、マスクを外すことに抵抗がある、外すことが不安と考える人も一定数いるわけですから、無理にマスクを外させることは子どもにとって必ずしも心理的に安全だとは言えない状況であり、マスクがあるからこそ、安心して教室にいたることができる子どももいる、一方的に外しなさいと言われた場合に、不安で学校に行けなくなるなどの影響もあり得るということなのです。

マスクを外す、外さないという行為を、自分の意思で行うことができる社会を実現するための「脱マスク」であることが望ましい。子ども達に「マスクを外しても感染対策の上では大丈夫だ」ということを発達状態に合わせて分かる言葉でし

「脱マスク」は誰のため？

コロナ禍も3年目が終わろうとしています。私たちの「新しい生活様式」も少し様子が変わってきました。例えばマスクの問題。「常時必ずつけていること」となっていたものが、屋外では季節を問わず、マスクの着用は原則不要、屋内では距離が確保できて、会話をほとんど行わない場合はマスクをしなくても良いと厚生労働省が発表するようになりました。学校でも、文科省は体育の時間や2m以内の距離で会話をするとき以外はマスクをつけないことになりました。また、給食時の黙食も見直されつつあります。しかし現実には上手くいきません。日本の社会は、まだ欧米のような「脱マスク」という風潮にならないのです。

「顔パンツ」という新語をご存じでしょうか。若者の間で使われる言葉ですが、人前でマスクを外すことは、下着を脱ぐのと同じような抵抗を感じるという意味があるそうです。「伊達（だて）マスク」という言葉があるように、日本人には、本来の衛生上の理由以外からマスクを常用する傾向がありますから、もともと心理的な側面からマスクを望む傾向が強かったところに、コロナ禍と

っかり伝え、その上で子どもの意見を聞き、「あなたはどうする？」と考えて判断させる。そしてその判断を尊重するために大人が動くことが大切なのであって、「子どものマスクを外させてあげる」ために親が動くことではありません。子どもたちの声をしっかりと聞き、主体性と選択の自由を子ども達が手にするための手段として「マスクをするかしないか」について考えてほしいという視点を加えることで、「脱マスク」という日常の問題は「子どもの権利」という社会的な問題につながるのです。

自己責任ではない責任とは

日常生活で感じる違和感、世の中の不条理について自分の主張を伝えることは素晴らしいことであり、必要なことですが、一方的な主張と受け取られてしまえば疎まれ、排除されてしまう難しさを持っています。マスク問題も、ただ要請しているだけでは、「うるさい人達」と捉えられがちです。

私たちは何か新しいことをするとき、「責任」で躓くことが多い気がします。「失敗したらどう責任取るのか」と言われたら、自分が悪いことをしている気になって、やる気がなくなりますし、自分が何かを言ったせいで責任を取らなければならない事態は避けたいと思うからですが、自分の行動に責任を取ることとはそんなに大変なことでしょうか。そもそも、責任とは何でしょう。どうやったら責任を取ることになるのでしょうか。責任

とは、「自分の起こしたことに対して、対応する、対応できる状態」だと辞書にありました。つまり、自分の権利（自分の行動）に対して対応することであり、権利や自由と密接な関係があるものなのです。私たちは毎日の小さな行動ですら必ず誰かに影響を与えます。それに対して、無意識に何らかの対応をとっています。それが責任を取る事であるならば、私たちは既に自分の行動に責任をとっていることになります。そう考えるならば、自分で責任をとれないと言うのは、自由でいたくないと自ら公言することになります。

ここで間違えてはいけないのは、この問題がいわゆる「自己責任」ではないということです。自分がこの社会で生きていくことに真剣に向き合えば、様々な社会課題の解決は自分自身の自由と権利につながると気が付きます。そのための行動に責任は伴う。しかし、それすらも自分のためであり、社会につながる事であるという意識を持つこと。誰かに責任を取ってもらうのではなく、社会を創る責任を一人一人が自覚できる世の中を、皆で考えていきましょう。

〈機関紙「日本再生」No.522の内容〉

2022/11/01 発行

自己責任・無責任連鎖から、責任の民主化というフォロワーシップへの転換を ● 3-7 面/コラム/一灯照隅 ● 7-11 面/インタビュー/政治責任を考える/鶴飼健史・西南学院大学教授

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・あなたは生活に違和感や不条理を感じた時、どうしますか？
- ・あなたにとって責任を取るとはどのようなことですか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。